

へフェンス」があるのにならうなんて言えない

——橋本久仁彦さんインタビュー

私が橋本久仁彦さんに出会ったのは、2010年8月末に大阪・應徳院で行われたプレイバックシアターのワークショップでのこと。應徳院は、ご住職の秋田光彦さんにインタビューの機会をいただいで以来ご縁のあるお寺であり、橋本さんのことは、いろんな人から話を聴いてお会いしてみたいと思っていた。ご縁の重なり導かれるようにして私は参加を申し込んだ。プレイバックシアターで何をするのかもよく知らないままで。

ワークショップの最初に、橋本さんはへフェンス」のことを話してくれた。人は隣の家との垣根がわずかに自分の土地に侵入しているかどうかで何十年と争うことができる。人はなぜ、それほど互いを隔てるへフェンス」に関心を寄せられるのかということに興味を感じる、というような話だったと記憶している。

私はなぜかこのへフェンス」の話がとても気になってしまった。インターネットが普及して以降、世の中には「つながる」という言葉が氾濫している。しかし、オンラインでの「つながり」が強くなるにつれて、人と話すことが苦手な若者は多くなつて

いく。人と人のつながりの大切さを説くオトナが増える一方で、身寄りなく死んでいく人たちは後を絶たず「無縁社会」だと言われる現実もある。いったいどこですれ違っているのだろう。なんで、こんな矛盾したことが起きてしまうんだろう？

私を感じていた「つながりたいのにつながれていないもどかしさ」が、ふとへフェンス」という言葉に重なったのだと思う。橋本さんはへフェンス」という言葉を使って何を言おうとしたのかもっと聴いてみたくなって、私はその場で橋本さんに話しかけて、インタビューを申し込んでしまった。

へフェンス」そしてへフィールド」をめぐるこのインタビュは、どうしても抽象的に過ぎる部分もあるのだけれど、少し時間のあるときにゆっくりとかみしめるように読み進めてもらえるなら、私はとてもうれしいです。(聞き手・ライター 杉本恭子)



へフェンス」を見ることからはじめよう

——橋本さんは、ご自身のプレイバックシアターの劇団名に『Theatre the Fence (シアター・ザ・フェンス)』という名前をつけておられますね。とても大切なポジションに、

◆橋本久仁彦／はしもとくにひこ

1958年生まれ。大阪市出身。高校教師時代はパーソン・セクター・アプローチに基づく「教えない授業」を実践。その後アメリカやインドを遊学し、人間同士の情緒的つながりや一体感を最大限に生かす組織作りと、エネルギーの枯渇しない自発的で創造的なコミュニケーションをもち続けている。平成2年より龍谷大学学生相談室カウンセラー、平成8年より龍谷大学カウンセリング課程の講師を兼職。平成9年にオーストラリアでの国際プレイバックシアター・カンファレンスに出席し、人間の自己実現と場の一体感をもたらすプレイバックシアターの大きな可能性を知る。平成13年12月で龍谷大学を退職し、現在はプレイ

バックシアタープロデューサーを立ち上げてその研究と普及に力を注いでいる。スクール・オブ・プレイバックシアター 日本校講師。

◆プレイバックシアター

観客や参加者が自分の体験したできごとを語り、それをその場ですぐに即興劇として演じる(プレイバックする) 独自の即興演劇。芸術的な側面を持つ一方で、その場で演じるもの(アクター)、語るもの(テラー)、観るもの(観客)が、

へフエンス」という言葉を位置つけておられるのかなと思うのですが。

「プレイバックシアターの劇団を持つ」と漠然と思っていた頃に、プレイバックシアターのなかで語られるストーリーに「隣の人との間の生垣の話」や「姑との間にあるバリアーの話」とか、「子どもの心が見えなくて壁がある」みたいな話がトントンと続いたんだよね。みんなが「相手に届かない」と壁を問題にしている。こちらからテーマを掲げずに真っ白で待っていて、その場にランダムに現れた話に共通する問題があるなら、それは我々の問題だよね。

——それは、ある特定の一日に起きたことですか？ それともプレイバックシアターではそういったテーマが現れやすいということでしょうか？

どちらもありませんけれど、たまたま符号のように重なって「やっぱりそうか」と思わせる一日があったんだね。かねてからの実感通りだなあと思って。

プレイバックシアターのスクールや研修会でいろんな劇団を見てみると、多くの人が「平和」「一体になる」「つながる」「友愛」「人類はひとつ」みたいなことを言っているんだよね。でも、実際には、目上の人や下の人たちを邪険に扱っていたり、劇団の代表が言うことをメンバーが恐れているのを見えたりして、掲げている「平和」や「一体感」と目の前にある現実が違うわけです。

僕自身も一体感というのは気持ちがいいと思っっているし、大学での仕事を辞めてからは仲間が僕の仕事を手伝ってくれたり、作ってくれている感じがある。出会う人たちの「つながり」で生きているのは間違いないんだけど、そのことをみんなに言おうとするときに「つながろう」とは言えないんだよね。目の前にブロックの壁があるのに、その向こうの人たちに「つながろう」って言うのは気色が悪い。

つながりたいなら、まず「この壁は何なんだろう」って言わないとね。向こうからは壁が見えていない人もいるので、まずは壁、つまりへフエンスの認識から始めないと。たとえば、内面的なへフエンスが僕と杉本さんの間にあるとしたら、まずは「俺たちうまくいってないよね」とビジョンを共有することが大事です。

人と出会い、つながりたいなら、最初のまなざしは自分の足元を見ないとね。自分の足が相手を踏んでいることが多いです。自分で踏んづけておいて「こんなにあなたが好きなのに、どうして開いてくれないの？」というのはおかしいですよね。

——相手を踏みつけながら」どうして開いてくれないの」ということが起きるのはどうしてなのでしょうか。

どうしてでしょうね？ 人は誰も、お母さん、あるいは育ててくれている誰かとの一対一の関係からスタートしますよね。かなり早い段階、だいたいみんな4〜5歳頃

共感や知恵、勇気や癒しをもたらされることになる。そのため、劇場の舞台はもちろん、ワークショップや教育の場、臨床や治療現場など広く活用されている。(wikipediaより)

には経験しているんじゃないかな。お母さんは子どもに「○○しなさい！」と、自分の気持ちを言います。子どもが「お母さん怒らないで」とおびえると、「怒ってないでしょ！あなたのことを思ってるからじゃない！どうしてわかんないの！」と言ったりする。子どもはちよつと泣きそうになるわけだよね。

お母さんは、子どもが自分の知らないものに出会って変わっていくことに対して不安になるわけです。そこで、お母さんの生きてきた人生観、価値観をぶつけ始めます。お母さんはそれを愛だと言いますが、それはいわゆるありのままの本物の愛ではなくてお母さんの欲望です。「そのようにしてくれれば、もっとあなたのが好きよ」っていうね。本物の愛であれば、相手が何をしようと思おうはずだし、相手のすることに敬意を払い頭を垂れてその行為の理由を聴くはずです。

たとえば「あなたを思ってこんなに尽くしてきたのにこの仕打ち！恩を仇で返すとはこのことね」と言うときに怒っているのはこちらです。こちら側が出した条件をなぜ飲まないのかと迫っている場合において、「へフェンス」を立てながら相手にながっているつもり」が成立しています。これは関係性ですけど、愛ではないですよ。愛が欲しいなら、我々が間に立てているへフェンスとその質について研究する必要があるだろうと思います。そのへフェンスを取れば、そこに愛はあるわけですから。

へフィールドへはつながっている

——へフェンスを外すことができれば、誰もがつながっている状態にあると思われ
ますか？

仕事を辞めてから、僕はよく公園で鳩に餌をやっていたんです。よく見ると一羽一羽に個性があるし、鳩に名前をつけられるくらいになっただけ。ところが、隣でおじさんがくしゃみをするのと一斉に全部飛び立つんです。こちらがさびしくなるくらいに一糸乱れず。どこで連絡しているんだろう？と思います、そんな風に飛べるのはつながっている状態があるからだと思いますね。

つながっているのはへフィールドです。人間も同じで、たとえば外から泣きながら入ってくる人がいれば、僕らはどんなに大事な話をしてもパッとその人の方を向いてしまいますね。へフィールド間のコミュニケーションは一瞬で起きるんだね。そして、ようやく頭が追いついてきたら「どうしたの？」「何で泣いているの？」と、言語を使って問いかけるわけです。へフェンスを立てているつもりでも完全に相互浸透していますよね。だからこそ人は揺れるし、揺れるのが苦しいからへフェンスを立てるんです。

——揺れるのが苦しくなってへフェンスを立ってしまっ。

へフェンスを立てるのは必要性があるからです。「これ以上入るな痛い！」とか「来ないで！」っていうために線を引っ張るんだね。相手に傷つけられるという予断がないときは、へフェンスを立てないのでオープンでいられるわけです。

——へフェンスそのものを一概に良い／悪いとは言えないんですね。

両面の質があると思います。必要に応じて流れを止めたりするものとして、我々がへフェンスを使っているならそれは有用ですよ。問題は、へフェンスを抜けないときですかね。へフェンスがお互いを傷つけてしまうのは、へフェンスが我々より上まで高くなっているときですよ。

——お互いを傷つけるほど高くなったへフェンスを低くしていくには、どこから始めたらいいんでしょうね。

へフェンスを無効化・無力化するには、やはり相手に声をかけるしかないよね。」と

りあえず、へフェンスは置いておいてちょっと話がしたい」とね。今、ふたりの間には何が起きているのか、このへフェンスを立てるエネルギーになっているのは何なのか、話し合わないかと。

柔らかな気持ち荒ぶるモノに変わるとき

——声をかけられずにいると、へフェンスは高くなり抜けなくなっていくということでしょうが。

高校の先生をやっていた頃、ある男子生徒が机に肘をついて、すごい目つきで睨みつけてきたことがあったんです。「こわ……。なんかオレ、あいつが腹立てるようなことを言ったかなあ」と思いつながら彼のそばを避けるように教科書を読んだりしているんだけど、気になってしかたがないから授業をやっているにも楽しくない。

こういふとき、教師は「授業中なんだからこっちは見ろ！」とか「何だその目は。言いたいことがあるなら言え！」と怒鳴ったり、「答えてみる」と当ててみたりしがちです。教師もまたへフェンスを立て、相手に負けない強い力で押し倒そうとしているわけですね。生徒に力があれば「何言うとなねん、先公。コラァッ！」と、さらに

高いヘフェンスを立ててきます。教師はまたがんばって他の教師を呼びに行くかもしれない。これで、彼は学校の問題児としての地位を確立していくこととなります。

僕は、そのときそういう風にできなかつたんだね。つらい思いをしながら授業をしていて、何度目かに自分の中で張りつめたものがぱつと動いた。生徒の横に行つたときに、膝をついてその子の下に座つてね「どうしたんやお前。さつきから怒ってるみたいやけど、俺なんかしたっけ？」と話しかけたんです。すると、その子は僕の顔を見てビツクリした顔をして「ううん、別になんにもないで」と言うんですね。

「えー？ でも、お前すごい殺気みたいなん放つてたで」「いや、おかんや。朝……」と、毎朝お母さんと彼の間で行われる痛々しいやりとりのことを話しました。あの目つきは、僕ではなくお母さんを見ていたんだね。それを聴いて、僕は肩の荷が一気に下りて気持ち良く授業ができた。それ以来、その子がそうなったときは、話を聴いてやればいいとわかつたので、この場合はヘフェンスは立ちませんでした。

彼は、もしかしたらお母さんといがみ合つて、お母さんを叩いたり、家中のものを壊したりしたかもしれない。でも、決して自分のしたことが気持ちいいわけではなく、本当はお母さんが自分のことをわかつてくれたら一番うれしい。それが実現しない悲しみを認めるのは嫌なので、苛立つて「ぶつ殺したるか！」と言いたくなります。子どものなかにあるのは、悲しさやさびしさ、そして自己嫌悪ですね。で、それを見た教師であつた僕のなかには、責められているような感じがあつて脅えが走るんです。

——どうして、責められているような感じになるのでしょうか。

生徒が僕を睨みつけるので、攻撃されているようなエネルギーを感じるわけだね。それは、お母さんに向けられたものだけけれど、それを見た僕には過去にそんな目を向けられて痛い目に合つた記憶が浮かんできます。親や教師にひどいことを言われたとか、子ども時代にいじめられたとか、記憶のなかのビビるような気持ちがよみがえるわけです。だから、弱みを見せてはいけないと「何やつてるんだ！」とガツンと行うとするわけですよ。

その事情は、怖かつたからですね。怖さの向こうにあるのは「怖がつている俺のことを察してくれよ」「授業できるように協力してほしい」という気持ちでしようか。これは、つながりたい感じですよ。両者が、同じ感じを持つているのにそれが抗うエネルギーに変えてしまう。このイメージは、子どもたちが見るアニメで「人間が悪魔みたいになる」とか「トカゲが龍に変わる」みたいな感じでよく現れてきますね。ほら、宮崎駿のジブリ映画もうまく描いていた……。

——『もののけ姫』の獅子神さまや『千と千尋の神隠し』の力オナシ。

◆『もののけ姫』

1997年公開、宮崎駿監督によるスタジオジブリの長編アニメ作品。『シン神』は「太古の森の奥深くに住まう神々の長。昼間は立派な角を持った鹿のような姿だが、夜はアイ达拉ポッチと呼ばれる巨人へと姿を変え、物を吸収し腐らせる能力を持つ。人間と神々の抗争には関わりたくない。生と死を司る森の生命の根源。」(Wikipediaより)。

◆『千と千尋の神隠し』

2001年公開、宮崎駿監督によるスタジオジブリの長編アニメ作品。人間の心にひそむ寂しさの神。ふだんは穏やかだが、主人公・千尋に盗んだ砂金を差し出して拒絶され、苦団子を食べさせられたことから怒り暴走する。

そうそう。世界中の人があのメタファーを理解しますよね。つながりたい感じが荒ぶるものに姿を変えると手をつけられなくなってしまう。でも、出だしは小さいところから始まるんです。いちばん根つこのところには、「これだけはどうしてもわかってほしい」という柔らかい気持ちがあるんだね。

せめてこれだけは、わかってもらわないとどこにも居られなくなる。それならもう、死んだ方がいいと思うところまで追い詰められてネガティブなものに転じるわけです。だから、ネガティブなパワーとして表れるものも、僕にとってはポジティブなものに映ります。

へフィールドを売ってしまった「善人」たち

——以前のインタビューで、橋本さんにとっては「地球全体がへフィールドだ」とお話されていましたね。へフィールドは死に物狂いで守る最後の砦になることもあれば、地球全体まで広がることもある。

あります。ただ、守っているものがある限り、僕はその人に信頼を持ちますね。僕が地球上をへフィールドだと感じていて、その人のへフィールドが自分の四畳半

の部屋だけだったとしても価値は同じだと思います。なので、僕はその人を仲間にしてすごく信頼しますね。

信頼できないと感じる人は、むしろ「善人」です。社会や大衆の好む観念を自分の意思に置き換えて、無自覚なままきれいごとを信じている人です。自分が何を大事にしているかを理解して受け取ってもらおうと、へフェンスを立てて抵抗している人たちに對して、「そんな生き方はネガティブである。閉じてはいけない」という風に見て、自分のしていることを吟味せずに相手のへフェンスを壊しに突進していく。「良いこと」をしているつもりだね。これは、荒ぶる獅子神のもう一つの姿ですね。

——その人たちのへフィールドはどんなっちゃっているんでしょう？

自分以外の何かや他人のへフィールドに完全に同化しながら、それを自分のへフィールドだと考えていると言いましょか。たとえば、上司の言うとおりに必死で仕事をして「僕の方針の通りによくやってくれたから褒美だ」と評価されたり、昇給してもらってねぎらわれることだったり。でも、それは上司のへフィールドに癒着しているわけですから、10年間尽くして「新しい人がきたから君はクビだ」と言われると恨みに思うでしょうね。

この恨みは当然ですし、また救いでもありません。このときに恨みを感じないなら居

◆以前のインタビュー
「エネルギーに乗って」
ワークショップの源流を探る読書会ウェブサイトに掲載されています。
<http://www.skunkworks.jp/genju/958>

◆エネルギー
「エネルギーに乗って」
インタビューのなかで、橋本さんは次のように話している。「自分がやりたいことっていう『舟』の真ん中にいたいんやなあ、ていうのがわかってね。
『エネルギー』って呼びかえて、ホクホクしてた。自分のエネルギーの真ん中にいたい、自分の舟に乗っていたいってこと。」

◆善人
インタビューのなかで、龍谷大学との関わりが長かった橋本さんは、浄土真宗の開祖・親鸞聖人の「悪人正機説の二節」善人なおもって往生を遂ぐ、いわんや悪人をや。」についても触れられていた。「悪人は自分

場所を失って死んでしまいます。上司や会社、社会のへフィールドに同化してきて否定されたら、自分が存在していなかったということになってしまいますから。わずかに、誰かのへフィールドのなかで認めていただいて実存するというだけで、主体を奪われているんですね。

恨みのなかには、自分のへフィールドがあります。「10年間も尽くしたのにこの仕打ちかよ」と本音が出てきます。尽くしていたのは自分のへフィールドを守るためだったんだね。苦しんで、苦しんで、必要な時間が経つと気づきはじめます。「なんで俺はこんなに苦しまなければいけないんだ？ 頼ったからだな」と。自分のへフィールドを作らずに、誰かのへフィールドのなかで生きられると思ったんだけど、最終的には所有者のへフィールドに過ぎないので、振り返ると自分のものがないような感覚に囚われるわけです。

——じゃあ、信頼できない「善人」は、自分のへフィールドを守れなかった人？

守れていないではなく、へフィールドを売った人あるいは買い手のために動くようになった人ですね。ミヒヤエル・エンデの『モモ』で描かれる時間どろぼう「灰色の男たち」のような勢力です。「俺はここであと10分ほどじっとしていたい」というような「意味のない時間」は認められず、誰だかわからない“所有者”の望む効率

に奉仕する時間だけが「時間」ということになっていくわけです。僕は「灰色の男たち」のような勢力には、ハッキリ目を覚まして真剣に立ち向かいたいと思います。

へフィールドの熱がへステージを創る

——へフィールドとへフェンスの関係はどうなっているのでしょうか？

たとえば、閉ざした部屋のなかで、みんなで円座になって何かしているとエネルギーが集まって一種のプールのようなものができます。時間が経つにつれて、場に温かみや熱のようなものができますよね。へフィールドの熱に浸かっていると、ひとりで探究しているものもずっとアクティブに、ダイナミックにキャッチできます。グループダイナミクスと言いますが、グループのパワーみたいなものを使うんだね。

ワークショップがはじまって3時間ほど経つと、遅れてきた人はへフィールドの熱と自分に温度差を感じてしまつてなかなか入りづらい。外から見ると、これは一種のへフェンスに見えますが、実際にはへフェンスというよりエネルギーの盛り上がりだと思えます。エネルギーがプールされてへフィールドができ、熱を帯びて盛

が悪人であることを知っています。知っているけれども、自分が理解されて何を大事にするか受け取ってもらえていないから抵抗しているわけです。ここで折れたら自分が消えてしまうから。親鸞はこの悪人が成仏すると言っている。僕は賛成ですね。

◆『モモ』ミヒヤエル・エンデ (岩波書店)

イタリア・ローマを思わせるような街に現れた「時間貯蓄銀行」と称する灰色の男たちによって人々から時間が盗まれてしまい、皆の心から余裕が消えてしまふ。しかし貧しくとも友人の話に耳を傾け、その人自身をとりもたせてくれる不思議な力を持つ少女モモが、冒険のなかで奪われた時間を取り戻すというストーリー。(wikipediaより)

り上がることでハステージンになっていく。

——ハステージンというのは、舞台装置のこと？

盛り上がったハフィールドの熱に結界を張ると、舞台装置としてのハステージンになりますね。僕が舞台装置としてのハステージンの意味に触れたのは、プレイバックシアターを始めてからです。演じる側と観る側をわざわざ分けて結界を作るのは、結界の向こう側にあるハステージンに何が起きてもいい状況を作るためなんだね。

以前、僕のカウンセリングを受けた後にインドに行った人がいて。彼は行方不明になり、約1年後に白骨化した遺体で発見されたんですね。その人の一周忌に、仲間と行ってプレイバックシアターをしました。プレイバックでは、ハステージンにその人が現れるわけですから、お母さんは息子が動くのを見て泣くこともできるし、後悔の思いを語りかけることもできる。このとき、結界の積極的な意味合いを見ました。

ラインを引いて結界を作ること、通常なら我々が到達できない相手と接触できる。この場合の結界は「つなげる」作用を持ちますよね。そして、ラインで区別することで、ハステージンに怖いものが現れても守られながら見ることもできます。ニューヨークなどでプレイバックシアターをすると、「この前、銃を持った暴漢に殺されそうになって怖い思いをしました」なんていう話が出てくるそうです。ハステージンには暴漢が

現れますが、こちら側には決して来ないから安心して自分の身に起こったことを見るということが成立します。

ハステージンあるいは舞台装置が可能にすること、その意味に僕は惹かれています。そのなかで、僕は非常に生き生きすることができるとし、自分と出会い結ばれるのがうれしくてやっているというか。相手を救うとか、相手を結びつけるというのは僕の仕事ではないですね。それは勝手に起こっているのです、僕は僕のことだけを知っていればいい。

ラインを引いて向こう側に触れる

——私は、プレイバックシアターを経験した後から、すべての人との会話がプレイバックのように感じられています。私の言葉に対して、相手が感じたことをプレイバックするように言葉を返してくれる、というようにした。

おっしゃる通りだと思います。

——その感じは、ラインを引くあるいは結界を張るといふことに似ているように思う

◆結界（けっかい）

聖なる領域と俗なる領域を分け、秩序を維持するために区域を限ること。本来は仏教用語。（Wikipediaより）

應典院で行われた、橋本さんと秋田住職の対談では、「まったく違うハ界ンをハ結ぶンもの、という視点でも語られた。お寺の山門で手水をして、世俗の汚れを落として聖なる領域である境内に入ると、そこには別な秩序に守られた空間がある。そうしてハ結界ンを超えて聖俗を往還することで、新たな視点を獲得することが可能になるのではないか。さらには、ハステージンを行き交うことには、同じような作用が起きるのではないかという可能性も提示された。

んです。こちら側にいると思うことで安心して相手の言葉を聴ける。

そうそう、同じですね。どこかを定点として見ていないと自分の状況が見えなくなる。これがラインを引くことの意味です。「ここまでではなかった」と言葉にすると、次に不明であることが見えてそっちへ進めます。「わかる」というのは、停止するためにあるわけではなく、次へ向かうためのステップですね。

我々は、「分かる」あるいは「分け取って」いくことで、視野を広げていくんだと思います。ラインを引いて向こうへいくために、向こう側に触れるためにね。ひとつずつ「分ける」ことをしながら進み、どこかで「わかりあう」ことをしないとね。

——ラインを引くことと、へフェンスを立てるのが少し混乱してしまつのですが。

「わかりあう」あるいは「つながる」ことを求めることから始まるという意味では基本的には似ているね。へフェンスを立てることも「ここまでが『私』だ」と言っていることです。ただ、へフェンスは、「ちょっと立ち止まってちゃんとわかってくれよ」と言いたくて、そうでないと先へ進めないから作る「防壁」ですよ。そこで一緒に立ち止まって、へフェンスを立てた理由を理解しあえばいいんだけど、へフェンスを立てたのにまだわかってくれないのか」「じゃあこっちはもつと高いへ

フェンスを立てるぞ」とやりだすと、へフェンスを立てること自体が目的化してしまう。そうなるともう、「俺のへフェンスの方が高い」とわからせることで、代償的に満足することになります。

やっぱり、どこかで止まるべきだよ。止まらないと、両方のへフェンスが重みに耐えられなくなって滅びてしまう。また、自然と「なぜこのへフェンスができたのか」を見たいという気持ちが動くはずなんだよね。

自分を聴くこと／相手を聴くこと

——自然とへフェンスの成り立ちを見たくなる？

自分自身でいけば、自然と自分が自分がへフェンスを立てた理由に興味が向くはず。でも、へフェンスをずーっと高くしていくことが可能になっているのは、自分を失っている人たちがたくさんいるからだね。自分が無意識のまま所属している大きなもの、へフェンスを立てるって命じる者がいて「それが良いことであり、お前たちのためだ」と言われて、それに反発する感覚を失くしているように見えます。

僕は、カンボジアの学校でプライベートクシアターのワークショップを行う『オーシャ

ンズ・カンボジア・プロジェクト』で4回現地を訪れています。ポル・ポト時代には、まだティーンエイジャーの子どもたちが、文字を読める大人たちを以上の大人を殺していったので、今も先生がいない。だから、僕らがカンボジアで先生をやってみたいという仲間を連れて行ったりするわけです。

校長先生のコン・ボーンさんは、虐殺を生き延びた人で「何でこんなことが起きたのか」と考えるわけです。子どもたちは、ポル・ポトを自分の親だと考えて、親の言うことをしようとがんばって人を殺した。自分自身で考えて疑問を口にした子は、みんなに吊るしあげられて責められるので自分を捨て、ポル・ポトのために生きるようになった。考えることを放棄して銃を撃てば、ごはんももらえるし誰にも責められない。だから、コン・ボーンさんは自分で考えて生きることにもっと誇りを持たせるために学校を作ったんだね。

同じ構造だと思います。自分で考えて「何をしているのか？」という問いが浮かべば、ヘフェンスンについても考えるはずですよ。権力者が民衆をコントロールするためのテクニクは、考えさせないようにすることなんだね。

——自分に問いを向けられない人は変わりようがない。

問いをポル・ポトに向けて「これでいいですか？」「いいですよ」と言われて銃を撃つ。

自分を問うていないよね。これは、自分を疎外する構造ですね。

——問いを自分に向けることで、自分を聴く。そして相手を聴くことになる。

そうですね。自分を聴くことができる人だけが、相手を聴くことができる。自分を聴かない人は、相手の話を聴けないはずですよ。構造上不可能ですから。権力者に問いを預けてしまっているとき、他の誰かが全然違うことを言い始めると不安になりますから「お前は何を言ってるんだ」と耳をふさいで、権力者の価値観を押し付けるんですね。でも、相手の気持ちを抑えこむと同時に、自分の心も押さえつけることになりません。同じ行為なんだね。相手の話を聴ける人は、まず自分の内側を聴いているはずですよ。聴くという一点が、僕にとってはヘフェンスンを超えて行く重要な原動力ですね。

◆ インタビューを終えて

インタビューは約1時間半。しずかにうねるように話し続けた橋本さんの声を文字に起こしながら、そして文字になった言葉を何度も読み返しながら、私は自分が誰かに対して立ててしまおうヘフェンスンについてずっと考え続けていた。それは、正直に

◆プロジェクト・オーシャンズ

橋本さんが、プレイバックシアターの仲間たちと行う海外遠征プロジェクト。カンボジアへは2010年までに4回訪れている。

◆ポル・ポト

(1928～1998) メルルージュ(カンボジア共産党)書記長。自らが国の授学金で留学したにも関わらず反体制運動に参加

した経験から、政治体制の矛盾を抱く知識階級を極度に恐れ、メガネをかけている人や文字を詠もうとした人は、「再教育」と称して徹底的に弾圧し殺害した。ポル・ポトの元には子どもたちは、彼を『オンカー』つまり『父』とも呼んでいたという。

コン・ボーンさん

ポル・ポト時代の殺戮荒野(キリング・フィールド)から奇跡的に生還したカンボジア人ジャーナリスト。処刑場から奇跡的に逃れ、家族とともに日本へ亡命した。著書に『殺戮荒野からの生還』(リベルタ出版)がある。

言っただけならいいけど、自分自身の問題から目をそらしてこの話を書くことはとてもできない。立ち止まり、また立ち止まって自分と向き合いながら書いていたら、ずいぶん長い時間がかかってしまった。

誰かのそばにいたい、触れたいと心から願っているのに、拒まれることを恐れてハフェンスくを立ててしまふ場合は、日常のなかにたくさんあるだろうと思う。寄り添い温め合いたいのに、お互いのトゲが傷つけあうので近づけない「ヤマアラシのジレンマ」のように。ハフェンスくを立てずに、心の中にある自分自身の願いに耳を澄ますこと。そして恐れることなく、相手の思いを聴くこと。それは、かんたんなようでとても難しいことだけれど、そのようにありたいと思う。

橋本さんに、聞いてみたいことはまだたくさんある。次は、どんな話を聴かせてもらおうか？ 近い未来に、このインタビュの続きでまた橋本さんに出会えることを願っている。